

びわこの考湖学

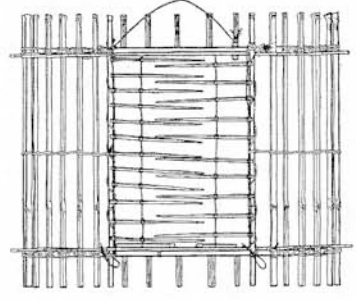
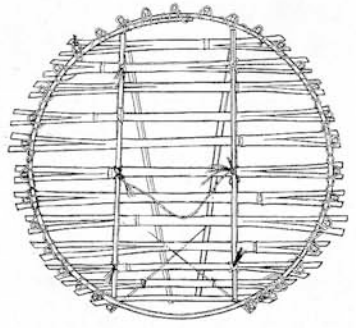
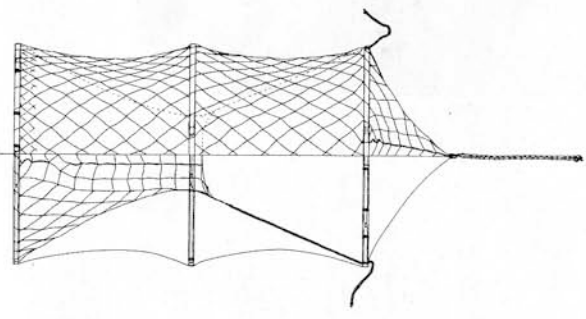
—第3部—

15

一番楽をして魚を捕る方法は何でしょうか？。それは、水中に罾を仕掛けて、魚が罾の中に入るのを待つて捕る方法ではないでしょうか。このような漁法を陥罾漁法（罾に魚を落とし込む）といいます。琵琶湖では、モンドリ、モジ、タツベなどと呼ばれていますが、これらの漁具は、形はさまざまですが、図に示したように、魚を閉じこめる部分に、中に入った魚が後戻りできないようにする「カエリ」「シタ」という仕掛けが組み込まれています。この罾が一番活躍するのが、春から初夏にかけての湖岸、水路です。この季節、大量の鮒や鯉が産卵のために、湖岸や水路にやってきます。この時、罾を仕掛けるのです。湖岸で使う場合は入り口を岸に向け、水草の中に潜り込んだ魚が琵琶湖に向かってバックするのを捕まえます。水路の場合は、下流に

口を向けて、水路を遡上する魚を捕まえます。この時期の魚達は、「産卵」という大きな目的のため、必死に行動するので、通り道さえ把握すれば、魚が勝手に罾に入ってくれます。しかし、産卵も一段落した夏頃になると、ただ罾を仕掛けただけでは魚は入ってくれません。そこで、罾の中に餌を入れて魚を誘い込む漁法を使います。特に鯉を捕るコイタツベの場合には、罾の底に杉の皮などを敷き、この上に蒸した麦などを置いて鯉を捕ったということです。この罾は、琵琶湖の中でも活躍します。現在でも盛んに行われている漁にエビ漁があります。魚の対象となるエビには、蝦豆でおなじみのスジ

かん せい 陥罾漁



モンドリとタツベ

エビと、最近では料理の付き出しによく使われる手長エビがあります。琵琶湖の手長エビは、茹でた際の赤の発色が良いということで、高級料理素材として珍重されています。一方スジエビは、南極オキアミが普及する以前は、磯釣りの餌として高い需要があり、盛んに捕られたということです。これらのエビを捕るのがエビタツベという小さな円筒形の漁具で、上にエビが入るカエリの付いた口があ

り、中に餌を入れて誘い込みます。ただ、小さいエビですからたくさん捕らなければ儲かりません。ですので、200個から300個ほどのエビタツベを幹繩に付け、延繩式に琵琶湖に沈める方法がとられています。また、鯉という魚（明治天皇がよなく好んだというので、皇の字が付いたという魚です）を捕るのに、竹ひごを簀のように編み込んでつくった、ヒガイモジという円筒形の罾を、同じように幹繩にたくさん付けて使いました。この時、小さな鯉を捕らないように、簀の間隔には厳しい規制があり、隙間の大きなモジしか使うことができませんでした。ここにも、捕りすぎない漁業の考えが反映されています。

これら陥罾漁具の起源は古く、県外の遺跡では弥生時代のものが出土しています。残念ながら、県内での出土例はまだありませんが、琵琶湖を代表する漁具ですので、近い将来、必ずどこかの遺跡から出土すると期待しています。

魚を罾に落とすし込む

(滋賀県立安土城考古博物館 大沼芳幸)